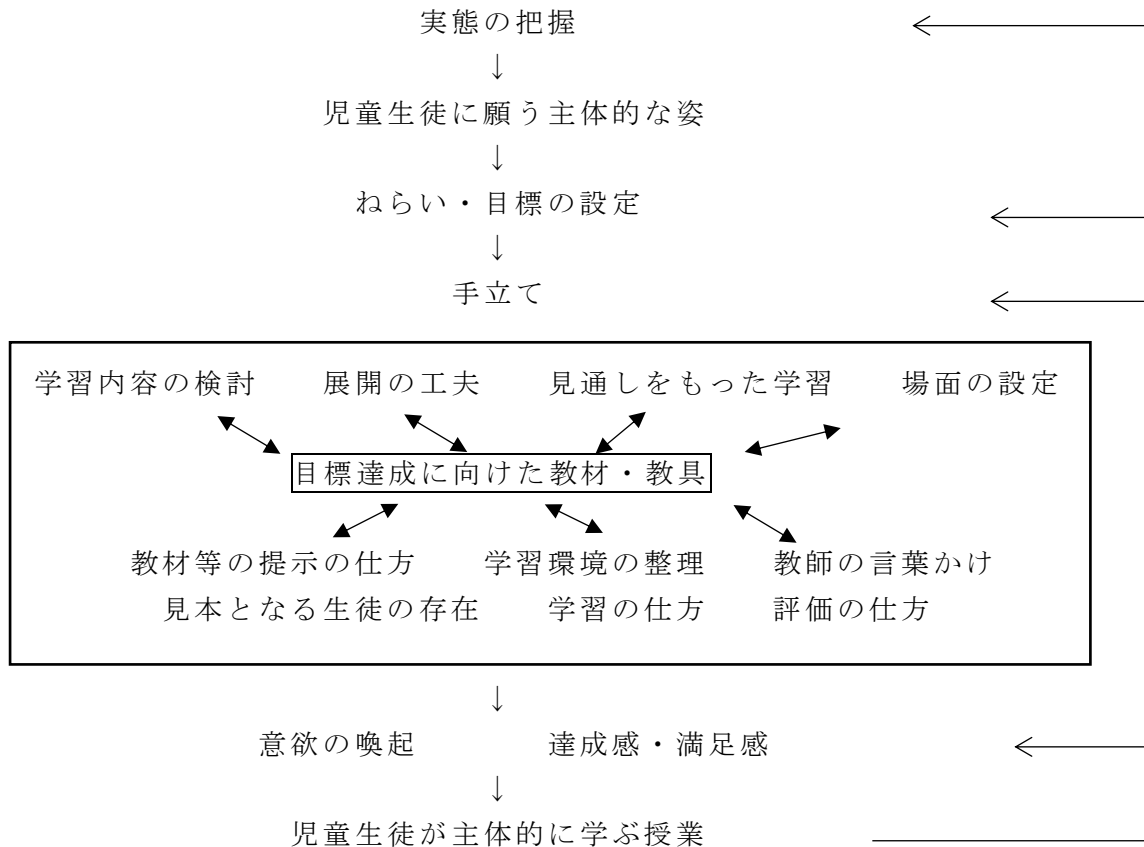


1 校内研究テーマ

「児童生徒が主体的に学ぶことができる授業づくり～教材・教具の工夫～」

2 テーマ設定の理由



平成28年度の研究では、児童生徒が主体的に学ぶことができる授業づくりに取り組み、「実態の把握」「学習内容の検討」「教材・教具の工夫」「意欲の喚起」「達成感」など様々な方向からのアプローチによる研究が進められ成果が得られた。

平成29年度 教育課程 重点目標
教師間で課題意識や指導の重点を共有し、児童生徒一人一人が主体的に学ぶことができる授業づくりと評価、改善に努める。

平成29年度は、28年度の研究の課題として多く上がり、教員のニーズが高かった「教材・教具の工夫」についてをテーマとして研究に取り組むこととした。研究を進めるにあたっては平成29年度の重点目標を受け、複数の目で実態の把握をし、児童生徒の課題や指導について捉え、児童生徒に願う主体的な姿を明確にした上で、目標達成に向けた教材を提示するタイミングや使い方、学習の様子などの評価と改善を行っていく。それらが児童生徒が主体的に学ぶことができる授業につながっていくのではないかと考えた。

3 研究の目的及び内容

児童生徒が主体的に取り組む姿を検討し、それに向けた教材・教具の工夫、実践、改善を通して児童生徒が主体的に学ぶことができる授業作りを行う。

4 研究の方法

- (1) 課題意識をもとに編成したチームを進める。
- (2) 紙面によるまとめや発表会で各チームの研究内容を共有する。

5 研究の実際

- (1) チームの研究

◎小学部

領域・教科	テーマ
国語①	生活に根ざした文字の「読み」と「書き」の学習
国語②	人とのやりとりを広げる聞く力、話す力
算数	生活に生きる数の学習について
日常生活の指導	自立へ向け、基本的な生活習慣の向上をめざした支援の工夫
生活単元学習	子どもの「やってみたい」を引き出す場の設定や、教材・教具の工夫
自立活動①	児童が興味をもち、意図的に操作することができる教材・教具の工夫
自立活動②	子どもが主体的に動ける授業づくり～コミュニケーション手段の獲得～
自立活動③	肢体不自由をもつ児童の実態に合わせた、主体的な動きを引き出す教材の工夫やかかわり合いについて

◎中学部

領域・教科	テーマ
日常生活の指導	生徒の伝える意欲を高める日常生活の指導の工夫 ～ボイスペンを活用した朝の会の進行の仕方について～
生活単元学習	生徒が主体的に学ぶことができる生活単元学習の授業づくり ～最後まで活動できる教材・教具の工夫～
作業学習	生徒に合った活動内容や手だてを工夫し、自分から取り組むことができる中学部の作業学習 ～中学部の作業学習で大切にしたいこと～
自立活動	生徒が自分からいきいきと活動できる教材づくり

◎高等部

領域・教科	テーマ
数学	日常生活の中の身近なものを活用した授業づくり～金銭の扱い～
体育	自分で選択し、意欲的に学習に取り組むための教材・教具の工夫 ～選択授業を通して～
職業	自分で考え、自分で解決する職業の授業づくり ～キャリアノートを使って・パート2～
日常生活の指導	これが大事！ＱＯＬ～生活の質の向上～
生活単元学習	見通しをもって主体的に取り組むための教材・教具の工夫と提示
作業学習	生徒が実態に合った作業学習を選ぶために
自立活動	これがあればできる！！

(2) 授業研究会

[分科会]

学部ごとに、研究授業のビデオをそれぞれの観点を持って視聴し、よかった点や改善点についてグループごとに協議を行い、その結果を学部内で共有した。

<小学部>

○研究授業 5年2・3組 生活単元学習「さつまいもでつくろう」

○協議の観点

①個人差に応じた教材・教具であったか。

②教師の支援の仕方や、言葉かけ・やりとりなどのコミュニケーションは適切であったか。

③意欲は継続されたか。

○指導助言（福島県特別支援教育センター指導主事 渡部和幸）

(ア) 観点①について

個に応じた工夫が随所にされていた。

・オリジナルの絵本を拡大し、児童によっては手元で確認することができるようにしていた。

・教室で使用している椅子やテーブルを使用することで、学習環境を最小限に変え、それらの脚には滑り止めやテニスボールをつけて環境に配慮していた。

・個に応じた手順表を作り、見える位置に置かれていた。

・アレルギーの対応についても、保護者と相談しながら米粉や豆乳を使っていた。

・砂糖には混ざり具合がわかるようにきび砂糖を使用したり食紅で色をつけたりしていた。

・ジップロックの上下がわかるようにテープを貼っていた。予備を準備していた。

・計量カップで量る時に量が分かりやすい目印を、使用する児童それぞれに応じた方法でつけた。

(イ) 観点②について

・教師とのかかわり、友達同士のかかわりの中で、児童から援助が欲しいと声が出た場面で自然に行われていた。

・学びを深める発問「これなに？」などがされていた。

・体験することで、例えば「なめる」「あまい」などの語彙の広がりにつながる。

・児童に身に付けさせたい力を意識するから、どう支援するかということにつながる。

(ウ) 観点③について

・学習指導要領の「指導計画の作成と各教科全体にわたる内容の取扱い」の部分での5つのポイント（実態、生活に結びつく、安全、家庭との連携、教材・教具の工夫）についてよく考えられていた。それにより、最後まで意欲が継続されていたのではないか。

< 中学部 >

○研究授業 1年4・5組 生活単元学習「2学期反省会をしよう」

○協議の観点

①実態に応じた教材・教具の提示であったか。

②主体性が引き出されたか。

○指導助言（福島県特別支援教育センター指導主事 富村和哉）

小学校の特別支援学級から入学した生徒もおり、これまですばらしい努力をされてきたことがわかる。

(ア) 生活単元学習の中で数学を取り入れたことについて

・数学で学習した図形を利用したこと→カリキュラム・マネジメント（関連して取り組むこと）

・カリキュラム・マネジメントとは・・・各教科等の教育内容を相互の関係で捉え、学校の教育目標を踏まえた教科横断的な視点で、その目標の達成に必要な教育の内容を組織的に配列していくこと。（文科省から）

・秋田県の学力が高い。各教科に横断的に取り組んでいることから学力が高い。

(イ) ていねいに取り組むということ

・「ていねい」という言葉のワーキングメモリができている人は、わかって取り組める。さらに「ていねいにどこをやったのか？」など、どのような状態が「ていねい」かを引き出していくと良い。

・教師が失敗例を見せて「ていねい」ということを教えても良い。

(ウ) 観点①について

・教材の提示のタイミング、教師の発問は、子どもたちの思考のタイミングと同じでありとても良かった。生徒達に考えさせることを大切にする。

・実態に応じた教材教具という考え方よりもねらいに応じた教材教具という考え方だと良い。ワークシートに記入する際に○をつける様式と文を記入する様式があった。書くことは、国語的要素の文の構成を意識させていく。このような一つ一つを学習としていく。

(エ) 観点②について

・学びには、「主体的な学び」「深い学び」「対話的な学び」がある。どのような学びの中で、どのように身に付けさせたい力を獲得させるか。

・主体的な学び→実行委員長を設定し、できる集団（学級集団：本人にとって身近で、自信をもって取り組める集団）の中で発表するという。本人の自立活動の目標を意識していた。このように自信をもたせることは大切である。

・深い学び→カラオケランキングで4票が2つあり、そのとき、教師は子ども達の様子を見て待つこととしていた。子ども達は4票の2つともを1位にした。次に2票が4つあり、K君から「どうしよう」という言葉があった。自分たちで解決すること。これが主体性である。すぐに結果を教師が伝えるのではなく、考える場を設けることは大切である。自分たちで解決した後は、ランキングは1位が2つあるときは、次は3位になることなどを教えていっても良い。

・対話的な学び→K君が両面テープを真ん中に貼っていた。Mさんが両面テープを周りに貼っていた。自分の思考から他の人のモデルで広がっていく。

<高等部>

○研究協議 3年8組 職業科「入社試験に向けて～自分をPRしよう～」

○協議の観点

- ①学習計画、時期、内容について
- ②教材・教具の改善、工夫について

○指導助言（福島県特別支援教育センター指導主事 林裕子）

（ア）研究授業の内容について

指導案について→この授業では「何を学ぶのか。」「何ができるようになるのか」「どのように学ぶのか」新学習指導要領の観点を踏まえながら題材設定の理由が考えられていた。他教科との関連を踏まえながら学校生活と絡めて書かれている。

（イ）観点①について

- ・学部の中で全員で見えていけるものを作る。
- ・小中の学習指導要領の各教科の段階を確認し次のステップに向かう。
- ・高等部3年の卒業まで何をするか考える。

（ウ）観点②について

- ・教員それぞれ背景が違う、長い経験や様々な経験がある。しかし、どんな教員にも学習指導要領が背景にある。どのように、どんな力、どんな資質や能力を育てるのかを考え教材教具の設定をする。
- ・教材教具の課題や操作ができるようになることが目標ではなく、教材教具を使用することで何をできるようにするのか、教員間で共通理解を図りながら取り組む。

[全体会]

小学部、中学部、高等部の各学部からの教員でグループを作り、次のことについてそれぞれで協議を行った。

○協議の観点

- ①実態が違う複数の児童の教材を作る（使う）時に、教材をお互いに共通して使えるものとして考えることや実態差への対応について。
- ②たくさんの課題から、どの部分を伸ばしていきたいかの見極めの仕方。易しすぎず、難しすぎず本人にぴったり合う課題、つながりのある課題の組み立て方について。

○指導助言

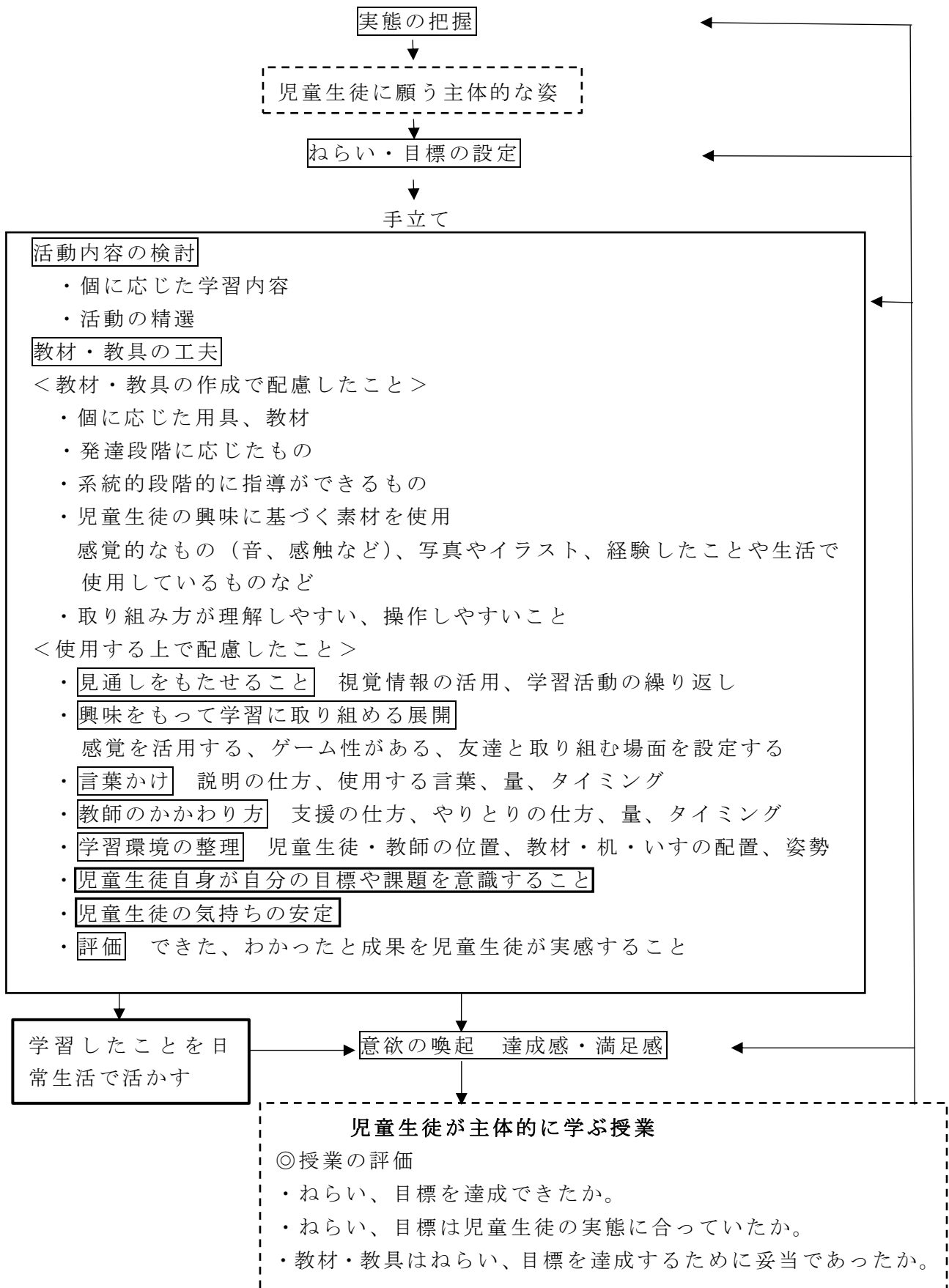
（ア）①について（福島県特別支援教育センター指導主事 林裕子）

- ・教材は授業のねらいの達成のための「手立て」として準備する。
- ・ねらいに系統性をもたせるために、学習指導要領を活用し、現在どの段階なのか、次に必要な力は何かを見極める。

（イ）②について（福島県特別支援教育センター指導主事 渡部和幸）

- ・キャリア教育の視点から将来どうしていくかを考え、短期目標を設定する。
- ・難易度を変えながら、できる状況作りをする。
- ・精一杯取り組むこと、首尾よく成し遂げることなど何に重きをおくか、自立・社会参加に向けて学校として育てたい資質や能力を検討していく。

6 研究の成果



※□に囲まれた項目は、H28年度校内研究で実践された授業づくりにおけるアプローチ

図1 「教材・教具の工夫の視点からみた授業づくり」

実践の成果は、前ページの図1「教材・教具の工夫の視点からみた授業づくり」のよ
うにまとめられる。

今年度は、教材・教具の工夫に視点を置いた授業づくりに取り組み、19チームの授業
実践を行った。児童生徒の目標達成に向けた教材・教具の工夫を、授業づくりにおける
様々な方向からのアプローチと関連させた結果、児童生徒が主体的に学ぶことができる
授業につながるということがわかった。

また、今年度の実践では、児童生徒自身の気持ちや課題への意識が目標達成につな
がること、さらに、学習後、日常生活で活かせたということを経験した児童生徒自身が自覚し、そ
れが自信となって次の学習への意欲につながることも実践の成果として挙げられ、児童
生徒自身の意識の持ち方が学習への取り組み、習得に大切であることがわかった。

(□の項目)

7 今後の課題

児童生徒が主体的に学ぶことができる授業づくりをするにあたり、発達段階や学力や
生活習慣の習得段階など個に応じた教材・教具を使用することが大切であることが確認
された。実態を的確に把握し、将来の姿を見すえ、よりの確なねらいや目標を設定して
学習内容を考えることができる。その段階のねらいや目標を達成して、次の段階へと系
統的なねらいや目標を明確にした主体的に学ぶ授業づくりをしていくことが、主体的に
生きる将来の姿に近づくと考える。